



TREE of International Exchange

国際交流の木の下で

本書を手にとって下さった皆様へ

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）は、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現をミッションとして、教育と文化の分野において地域協力・交流活動を推進しています。その活動の一つとして、2001年より日本と韓国・中国・タイ・インドとそれぞれ二か国間で教職員の国際交流事業を行ってきました。このたび、20年にわたりユネスコ・国際連合大学・文部科学省の委託を受けて実施してきた「初等中等教職員国際交流事業」の成果と教職員国際交流からの学びを現場の教職員の方々の手に届きやすい形でまとめるため、本書“TREE of International Exchange -国際交流の木の下で-”を制作することとなりました。

ACCUで実施している教職員国際交流事業には、国内外の様々な地域から若手・中堅・ベテラン・管理職問わず、多様な背景を持つ方々がご参加・ご協力くださっています。今回は、そんな多様なメンバーにご自身の経験や教育活動を共有していただきながら、誰もがどこかの部分に「共感」できる冊子の制作を目指しました。

2020年、ACCUは本事業に関わった教職員が交流と学びを深めるウェブサイト“Asia-Pacific Educators’ Platform: TREE”を立ち上げました。

TREEという名前は、Transformative learning（変容する学び）、Respect for diversity（多様性への理解と寛容性）、Exploration（探究）、Exchanges（交流）の頭文字からとって名付けたものです。TREEのもとで世界の教職員がつながり、交流を通して学びを深め、ともに持続可能な未来をつくっていくことをイメージしています。本書も、手に取って下さる方々にとって何かのきっかけになることを願ってやみません。

最後に、本書の制作にあたりご協力いただいた皆様に、この場を借りて深く御礼申し上げます。

CONTENTS

- 3 本書を手にとって下さった皆様へ
- 7 第1章 教職員国際交流事業とは**
- 8 教職員国際交流事業の紹介
- 11 多様な国際交流実績の創出と学びのひろがり
- 15 第2章 全国の教育現場から 参加者の経験と実践**
- 16 概要
- 18 学校事務職員が見つないだ韓国水原明仁初等学校との交流
坂下 充輝（札幌市立北野平小学校 学校事務職員）
- 20 学校司書として参加して
朝日 仁美（糸魚川市教育委員会こども教育課 学校司書）
- 22 なぜ海外研修に参加した教員は帰国後、飛躍的に成長するのか？
安部 裕太郎（JICA 青年海外協力隊（小学校教育 / ベナン共和国））
- 24 高校生の心に平和の種をまく「総合的な探究の時間」
松岡 由美子（埼玉県立浦和西高等学校 教諭）
- 26 普通の学校でも取り組める国際交流
大塚 雅信（千葉県立国分高等学校 教諭）
- 28 ユネスコスクール校長として取り組んだこと
手島 利夫（ESD,SDGsを推進する手島利夫の研究室 室長 / 江東区立八名川小学校 前校長）
- 30 「繋がりを求めて」そして「繋がりを維持して」
町田 直美（東京都立王子特別支援学校 主任教諭）
- 32 Thai and Japanese nursery school exchange ideas meeting on-line
物井 タリニー（社会福祉法人聖愛学舎 もみの木保育園長 看護師）
- 34 「親中派」でなくていい。「知中派」に！
高橋 勝也（名古屋経済大学法学部 准教授）
- 36 教職員の交流から SDGs 協働支援活動へ
松野 至（名古屋経済大学市邨高等学校 教諭）
- 38 学びにおける「ボーダーレス」の視点
大栗 真佐美（京都市立修学院中学校 教諭）
- 40 教職員の国際交流を活かすということ
竹島 潤（国立大学法人岡山大学教育学部附属中学校 教諭 / 研究主任）

CONTENTS

- 42 「わくわくする学び」を子どもたちとともに
富樫 未来（徳島県上板町立高志小学校 教諭）
- 44 スペシャルインタビュー
～地域とともに～ 誰一人取り残さない多文化共生図書館運営
新宿区立大久保図書館 館長 米田 雅朗氏
- 49 **第3章 教職員国際交流事業のいま**
- 50 日本 × 中国 オンライン学習
- 52 日本 × 韓国 オンライン交流
- 54 タイの先生の実践 ―日本との教育交流
- 56 インドの先生の実践 ―多様なオンラインプラットフォームを活用して
- 58 持続可能な社会の創り手を育む教職員国際交流
-
- 60 ユネスコ・アジア文化センター（ACCU）について
- 61 おわりに

第1章

教職員国際交流事業とは

教職員国際交流事業の紹介

先生が変わる 子どもが変わる 学校が変わる 学びの場

文部科学省委託「初等中等教職員国際交流事業」は、未来を担う子どもたちを育む「先生」を対象とした国際交流プログラムです。教職員がお互いの国の学校や教育文化施設を訪問し、現地の先生や児童・生徒と交流し、教育事情を学びます。顔が見える交流によって多種多様な文化の理解と友好を深め、教員自身が変わっていくことは、子どもたちの豊かな学びへとつながります。

1 これまでの交流実績 (2020年10月現在)

韓国との交流

韓国から日本へ 2001年～交流人数 2,188名

日本から韓国へ 2003年～交流人数 715名

協力機関:韓国教育部 韓国ユネスコ国内委員会



中国との交流

中国から日本へ 2002年～交流人数 1,707名

日本から中国へ 2003年～交流人数 399名

協力機関:中国教育部 中国教育国際交流協会

タイとの交流

タイから日本へ 2015年～交流人数 75名

日本からタイへ 2018年～交流人数 12名

協力機関:タイ教育省



インドとの交流

インドから日本へ 2016年～交流人数 55名

協力機関:インド連邦政府教育省
インド環境教育センター

2 初等中等教職員国際交流事業会員専用SNS Asia-Pacific Educators' Platform : TREE

TREEは、ACCUが2001年から実施してきた教職員対象の国際交流プログラムに参加・協力した教職員がつながるための会員制SNSです。令和2年6月から本格運用を開始しました。日本国内の教職員はもちろんのこと、韓国・中国・タイ・インドの教職員とも交流を深めることができます。

会員登録の申請をいただいた後、プログラムへの参加・協力経歴を確認できた場合のみ、サイト管理者であるACCUが登録申請を承認します。関係者以外の方が閲覧することがないため、安心してご参加いただけます。

TREE 会員制SNS

<https://edu-tree.mext.go.jp/>

TREEの主な機能

TREEには、国内外の教職員をつなぐ3つの主な機能があります。ネットワークや活動の拡大にお役立てください。



談話室の作成・交流

テーマに沿った談話室を作成し、メンバー間で情報交換や交流をすることができます。



DM(ダイレクトメッセージ)の送受信

国内外のユーザー間でメッセージのやり取りができます。



Q&A

国内外のユーザーに対して、質問をしたりイベントのお知らせを掲載できます。



3 教職員海外派遣事業の流れ

交流事業参加者募集開始

当センターホームページ・TREE上での公募と共に、各自治体の教育委員会等へ募集のご案内をお送りします。

参加者決定・TREEへの登録

プログラムごとに10名弱～50名程度の参加者を、実施団体の厳正なる選考の上、決定します。
決定後はTREEに登録し、参加者間での情報交換と事前学習を行います。

出発前オリエンテーション・現地プログラム参加

日本国内各地から参加する教職員同士交流を深め、各国へ出発します。およそ1週間のプログラム中、現地では学校訪問や文化施設を視察します。

プログラム参加後の活動

プログラムの感想や、経験をどのようにその後の教育活動に活かしていくかについて報告していただきます。
プログラム参加をきっかけに、国内の先生同士の交流や海外の先生との情報交換、TREEでのつながり、別の派遣プログラム・招へいプログラムへの参加・協力に発展しています。

- ※こちらで紹介するのは、新型コロナウイルスの影響のない場合の実施体制です。
- ※実施時期は交流相手国によって異なります。
- ※日本の学校にて海外からの招へい教職員との交流をご希望の場合は別途ご相談ください。

多様な国際交流実績の創出と学びのひろがり

先生とは平和で持続可能な社会の創り手を育成するキーパーソンです。
プログラムで得られた学びを未来を担う子ども達と分かち合い、学びをつなげていくことで、よりよい未来の種をまくだけでなく、その学びは子ども達からその保護者へ、地域全体へと広がっていき、ひいては社会の変容をもたらします。先生方おひとりおひとりが持つ発信力、未来への影響力がこの事業のキーポイントです。

教職員からはじまる学びのひろがり 相互作用がもたらす社会の変容



多様な国際交流実績の創出

本プログラムは、日本・韓国・中国・タイ・インドの様々な地域の方にご参加いただいています。とくに日本では、派遣プログラム・招へいプログラムのどちらにおいても、国公私立、ユネスコスクール加盟有無を問わず幅広い参加がある点が特徴といえます。

様々な地域から 参加者の多様性



韓国からの参加者(2018年度日本訪問)

17の広域自治団体から98名参加
(2019年度は新型コロナウイルス感染拡大の影響により中止)

※韓国との交流は2001年から20年間毎年行われており、本事業において最も歴史の長いプログラムです。



中国からの参加者(2019年度日本訪問)

2つの直轄市、1つの省から25名参加、27,061名の児童・生徒・同僚・地域住民などに学びが広がった

※中国は人口が多いため、年度ごとに2-3の省が持ち回りで参加者を輩出します。



日本からの参加者(2019年度海外派遣事業)

26都道府県から75名参加、24,869名の児童・生徒・同僚・地域住民などに学びが広がった



インドからの参加者(2019年度日本訪問)

8つの州から15名参加、6,410名の児童・生徒・同僚・地域住民などに学びが広がった

※インドは毎回多様な州から参加者が選ばれますが、地域によって異なる言語を話すため、参加者間の共通言語としては英語を使用します。



タイからの参加者(2019年度日本訪問)

9の都県から15名参加、24,830名の児童・生徒・同僚・地域住民などに学びが広がった

※国際交流の機会が少ない地方の学校からも、多くの参加者が選ばれています。

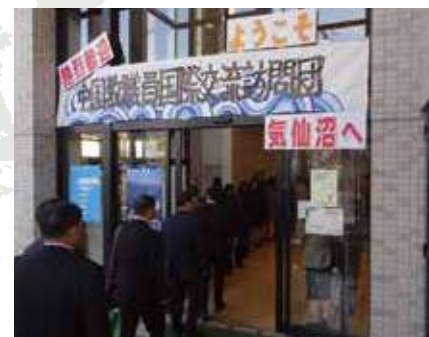
多岐にわたる訪問先で、教育交流プログラムならではの経験を



教育交流会 (2019年度インド招へい)



京都府宇治市 (2018年度韓国招へい)



宮城県気仙沼市 (2019年度中国招へい)



徳島県板野郡上板町 (2019年度タイ招へい)



タイ王国カンチャナブリー県 (2019年度タイ派遣)



中国雲南省 (2019年度中国派遣)

まいた種を育むために

国際交流は、一足飛びに世の中が変わる事業ではありません。平和で持続可能な社会を実現するという大きな目標を達成するには、世代を超えて時間をかけて交流し、歩み寄り、相互理解を深めていくことが重要です。一週間のプログラムで実現できるのは、この種まきの部分だと考えています。私たちが本当に目指しているところは一週間のプログラムのその先にあります。



様々な形で学びを伝える

教職員国際交流事業に参加した教職員には、自身の経験や学びを日々の教育活動等を通して伝えていくことが期待されています。

最初の段階としては担当する授業・クラスの児童生徒たちや同僚の教職員など、身近な相手への広がりが見込まれます。広く学びを伝えることは難しく見えますが、2019年にはネット配信番組に出演したというユニークな事例もありました(写真)。第2章では、様々な方法で学びを伝え、広げている日本国内の事例をご紹介します。



2019年度のプログラム参加者で、タイ東部にあるウボンラーチャターニー県内の学校から参加した2名が地域発のネット配信番組とラジオに出演し、日本を訪問した体験を語った。

第2章

全国の教育現場から 参加者の経験と実践

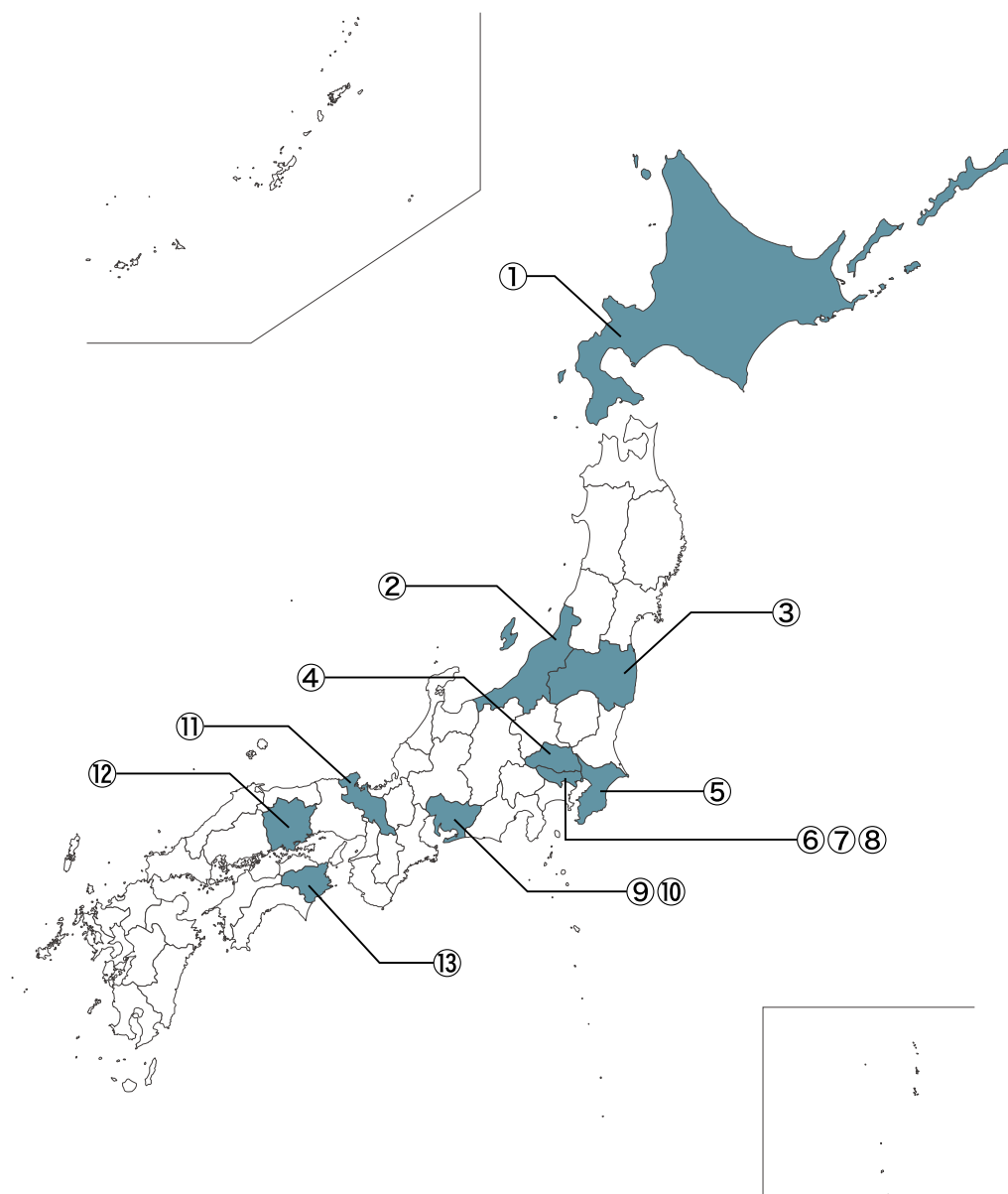
概要

2001年からの約20年間で、41都道府県の延べ814の学校・機関が海外教職員を受け入れ、1,200名以上の教職員が海外への派遣プログラムや海外教職員との交流会に参加しました。

第2章では、これまで事業にご参加・ご協力くださった10都道府県13名の方が登場し、それぞれの実践や経験を共有していただきます。

番号	執筆者氏名	キーワード	ページ
①	坂下 充輝	学校事務職員、小学校、学校間交流	18-19
②	朝日 仁美	日韓の学校図書館、韓国絵本、SDGs	20-21
③	安部 裕太郎	海外研修、教員による国際理解	22-23
④	松岡 由美子	総合的な探究の時間、多様性	24-25
⑤	大塚 雅信	普通科の高校での実践、アジア太平洋地域との交流	26-27
⑥	手島 利夫	管理職、ユネスコスクール、ESD	28-29
⑦	町田 直美	特別支援教育、日韓交流	30-31
⑧	物井 タリニー	保育園、日本とタイの交流	32-33
⑨	高橋 勝也	訪問・交流による対相手国感情の変化	34-35
⑩	松野 至	SDGs、アクティブ・ラーニング、地球市民	36-37
⑪	大栗 真佐美	図書館教育、漢文教育	38-39
⑫	竹島 潤	留学生との交流、ユネスコスクール	40-41
⑬	富樫 未来	価値観の変化、教員の変容	42-43

執筆者の分布



学校事務職員がつないだ

韓国水原明仁初等学校との交流

札幌市立北野平小学校 学校事務職員
坂下 充輝

●韓国派遣プログラムに学校事務職員として参加して

2019年7月に実施された初等中等教職員国際交流事業の韓国派遣プログラムに参加した。学校事務職員として参加した意義と勤務校(札幌市立北野平小学校)が始めた韓国の水原明仁初等学校との交流について記述する。複雑かつ多様になった学校の課題に対して、教員以外の職種も専門性を活かして対応していく「チーム学校」の考え方を2015年に中央教育審議会が示した。これに伴い2017年4月に学校教育法の学校事務職員に関する規程も改正され、総務・財務の面から従来以上に学校経営へ参画することになっている。私自身の視察は、総務の点では、児童生徒の日課や教職員組織の状況や動線について、財務の点では施設設備や備品を含んだ学習環境について着目して行った。学校教育に対する予算の割合が多い韓国の学校教育の状況一教職員の余裕がある働き方や整備水準の高い施設や備品一を目の当たりにできたことは、帰国後の日々の学校改善に役立っている。

●韓国水原明仁初等学校との交流—取り組みと将来にむけて—

韓国の水原明仁初等学校と勤務校で開始した交流は、派遣プログラムで水原松林^{ソンリム}初等学校を訪問した際に、近接校の校長として来校していたソン・ Cholフン明仁初等学校校長と私が、昼食時に隣席になったことを契機としている。初年度は勤務校の4学年と相手校の5学年の児童とが、相手国の特徴について本やインターネットで調べたうえで外部講師から講義を受ける調べ学習を行い、その後に旗の共同制作を行うこととした。1m×2m程度の大きさの白布に、最初に相手校の5年生が、ハングル、日本語、英語でのメッセージや両国をイメージするイラストを半分程度の余白を残して書き込んだものを2枚制作し、その2枚を日本に運び、勤務校の4年生が、余白に同じくメッセージやイラストを書き込み、1枚を明仁初等学校に戻し、「友情交流の証」として持ち合うのである。並行して教職員の相互訪問も行った。11月に私が相手校を訪

問し、授業の様子や施設等を視察した。その訪問時の5年生による歓迎集会では、日本のアイドルグループ「嵐」の「ふるさと」の合唱が日本語で披露され、感動的な体験であった。また、私が北海道や本校の様子の講義を行った。2020年2月には相手校からソン校長、ユン教務部長、キム国際交流担当の3名が来校した。その際には4年生が歓迎集会を行い、「ふるさと」を韓国語で披露した。「ふるさと」は韓国語の訳詞がなかったため、キム教師に韓国語訳を依頼し、それで練習を重ねての披露であり、3人は涙ぐみながら鑑賞した。そして、ソン校長が講話し、キム教師が韓国や相手校を紹介する講義を行った。これらの学習で児童は、様々なこと—韓国の国や文化といった知識に加えて、多様な他者の存在の認識、英語の活用、翻訳アプリなど情報活用力を学ぶことができた。特に日本の歌を韓国語で披露し感動を得たことで高い自己有用感を感じ、指導した教員も達成感を得る機会となった。

2年目となる本年(2020年度)は、勤務校ではカリキュラムの柱の1つに位置付けることとし、相手校も、教職員と代表児童の来訪旅費の予算確保をして、交流を発展させ、定着を図るように考えていた。しかし、コロナ禍によって大きな変更を余儀なくされた。それでも「灯は絶やさない」という考え方のもとで、Zoomを活用した児童間の交流を実施しようと進めている。Zoomにより、リアルタイムの交流が比較的容易に実現できると、将来にわたって交流が継続するためにも意義は大きい。

最後に、学校事務職員として私が担っている役割について記述する。両校の交流のスタート時点では、面識があるのはソン校長と私だけであったため、2人でSNSで連絡を取り、基本的な双方の考え方について合意形成を図っていった。細かな交流内容はキム教師と私とでSNSで連絡を取り合いながら確認を行った(SNS(LINE)には日・韓両方の無料通訳機能があり便利である)。勤務校の教員には、面識もないなかで連絡調整を進めることは負担感が大きい。また、その後の、実際の交流学習にあたっては、調べ学習の際のサポートや歓迎集会の通訳の手配などを担っている。今後はICTを活用して両校の児童交流に取り組む予定である。その際にも、ICT活用のための設定や付随する手続きなど、学校事務職員が担うことで、より質の高い学校間交流の実現を図れると考えている。



Zoom を活用した児童間交流

学校司書として参加して

糸魚川市教育委員会 とも教育課 学校司書

朝日 仁美

私は新潟県糸魚川市で学校司書をしています。2019年度の韓国訪問プログラムには、学校司書という立場で、訪問先の小学校などでの学校図書館の見学を自分なりに目的とし参加をしました。また学校図書館だけでなく、教室や廊下に配架されている絵本や読みものにも興味を持ち、時には図書館担当者の方に質問などをしながら、プログラム期間を過ごしました。

見学させて頂いた学校図書館は、壁に大きな書架が配置され、学習や調べものができる長机があり、絵本を閲覧するスペースは床にカーペットが敷いてありました。個人的見解ですが、部屋としては日本の学校図書館と大差なく感じました。設備的な観点からは、本を除菌するための機械が学校図書館にあったことに驚きました。全小学校に設置されている訳ではないとのことでしたが、大きな小学校にはあるようでした。また、絵本や読みものを問わず、日本の作品が多数あったことも驚きました。日本で人気の作品がいち早く韓国語訳されていて、それを学校図書館で購入して児童に紹介している様でした。お話を伺った学校図書館担当者はヨシタケ シンスケが書いた『あるかしら書店』（ポプラ社 2017年6月初版）の韓国版を面白く読んだことと小学生にも人気があることを教えてくれました。

その他には、あんびるやすこ作「魔法の庭ものがたり」シリーズ（ポプラ社）やさとうわきこ作「ばばあちゃん」シリーズ（福音館書店）などもありました。急な見学でしたが、図書館担当者が司書資格をお持ちではないことや非常勤勤務であることなども知ることができ、韓国の学校図書館事情を少しだけ知れた気がしました。

帰国後、上記に記したような韓国の学校図書館の話と日本で販売されている韓国絵本の紹介をしながら、隣国である韓国について理解を深める授業を高学年にさせて頂きました。観光名所にもなっている景福宮の絵本と『こいぬのうんち』（平凡社 2000年9月初版）に関しては韓国語の絵本も用意しました。自校で所蔵してあっ

た韓国についての資料や韓国料理の資料も紹介してブックトークを行いました。最後に韓国とのパートナーシップについて考えてもらえるようにと、SDGsにもふれ、これから社会の担い手となる子どもたちに、メディアからの情報だけでなく、実際に訪問して自分の目や耳で学び考えて欲しいと伝えました。授業終了後は図書館内に少しの間、韓国コーナーを設け、他学年にも手に取ってもらえる機会を作りました。

学校司書という立場で参加したので、学校図書館を活用して児童に韓国という国について考える時間が作れたことは本当に良かったと思いました。私の中では大きな成果になりました。



帰国後 糸魚川の小学校での別置韓国コーナー



韓国語版あんびるやすこ作品



本を除菌する機械

なぜ海外研修に参加した教員は帰国後、 飛躍的に成長するのか？

JICA 青年海外協力隊 (小学校教育/ベナン共和国)

安部 裕太郎

私は 2018 年 6 月の「中国政府日本教職員招へいプログラム」により、北京・上海・蘭州を訪問した。また派遣団体は異なるものの、同年 10 月にはニュージーランド、その前年 8 月には韓国に、そして 2019 年 7 月からは JICA 青年海外協力隊 (小学校教育) として、西アフリカのベナン共和国に派遣されている。なぜ私がこれほどまでに海外研修に積極的なのか。それは「学びが大きい」ことに他ならない。私自身の中・高社会科教員ということもあるのだろうが、それでも校種・教科問わず学べることは多いと私は感じている。皮肉なもので、教員は仕事を頑張ろうと思えば思うほど学校に長時間籠ることになる。休日返上で部活動指導や授業準備を行い、毎日多量の「アウトプット」を求められるも、新しい学びや気づきを得る「インプット」の機会は極端に少ない。「乾いた布」を絞っても水が出てこないように、良質な「インプット」は優れた学校教育が施される素地を成すものである。仮に「ある時点」で優れた学校教育が展開されていたとしても、時代は刻々と推移している。したがって、教員は常に自身を能動的に「アップデート」する姿勢が求められる。そして、海外研修への参加こそが時代や社会のパラダイムシフトに柔軟に対応し、先進的で効果的な教育活動を展開できる教員を育成する一助になると私は考えている。

その最大の理由は、国内では味わうことのできない様々な「経験」を得ることができる点にある。学校には多様な子どもたちが在籍しており、彼ら一人ひとりに応じた教育が求められている。すなわち、教員が自らの教育観を押し付けるのではなく、子どもたち一人ひとりに寄り添い、共感する姿勢が何より大切ということである。この「共感する」というスキルは教員自身の良質で豊かな「経験」に比例すると私は考えている。私は西アフリカという文化・宗教・言語が全く異なる地域において、「外国人である」という少数派 (マイノリティ) の立場を味わうことになった。公用語であるフランス語が不自由なために、パン一つですら満足に買うことができない。この

地では何をやるにも半人前以下しかできず、多くの現地の人々に支えられ、助けられた。「自分がアフリカの教育を変える！」などと意気込んで日本を出発したものの、現地では自分がいかに無力な存在であるかを痛感させられた。そんな辛く、情けなく、恥ずかしく、悔しい経験をエネルギー溢れる若いうちに味わえたことは非常に貴重であった。異国で生活することは決して楽しいことばかりではない。ましてや「観光旅行」ではなく、「働く」ということは想像を絶する様々なストレスに見舞われる。ただ、そこで得られた「経験」は何物にも代えがたい自らの大きな財産となる。このような「経験」によって、一人の人間として成長・成熟することが、ひいては教員としての資質・能力を向上させるのではないかと私は考えている。

「経験せずとも情報が得られる」ネット隆盛の現代だからこそ、実際に「経験」することの価値は高い。いい教育は、いい教師によって施される。「素敵で魅力的な先生」を一人でも多く育てたい、そして自らもそのような先生であり続けたい。海外で得た様々な「経験」を日本の学校教育の発展のために還元していく所存である。



「抽象的な言葉」ではなく、それを「実体験」として知っているということは大きな強みとなる

高校生の心に平和の種をまく 「総合的な探究の時間」

埼玉県立浦和西高等学校 教諭

松岡 由美子

私は 2018 年韓国政府日本教職員招へいプログラムにて、韓国に派遣された。この研修で感じたことは、韓国文化や人々の心の美しさであり、隣国の懐の大きさであった。そして日韓関係の重要性を強く感じた。

この想いをベースとして 2019 年「総合的な探究の時間」1 学年の年間プログラムを作成した取り組みを紹介したい。コンセプトは「多様性を知る」テーマはタイムリーな「オリンピック」にした。年間計画の柱は①「パラリンピック選手を通して多様性を学ぶ」②「前回夏のリオデジャネイロオリンピック開会式や難民団から多様性を学ぶ」③「UNHCR 日本協会の方から難民問題を学ぶ」④「シリアからの難民の方から多様性を学ぶ」であった。3 学期には、生徒一人一人がテーマを決め研究報告論文をまとめることにした。そして、これらの柱の間に論文指導や読書課題も実施した。とりわけ④「シリアからの難民の方から多様性を学ぶ」を中心に、生徒の学習効果も含め述べることにする。

私は政治経済授業準備の一環で偶然見つけたテレビのドキュメンタリー映像から、勤務校の近くにシリア難民の方が住みレストランを開いたことを知った。そこでそのレストランを訪れ難民の方と親しくなっていた。彼は難民申請が2回不許可となり、さいたま地方裁判所に訴えを起こしていた。そして苦勞して妻と2人のお子さんをリビアの難民キャンプから呼び寄せていた。クルド系シリア人である彼は、穏やかでとてもやさしい人柄であるが、家族の将来を不安視し祖国を憂っていた。その彼をこの企画にお招きしたのは、生徒にカルチャーショックを経験させたかったからだ。殆どの生徒たちは「外国人」＝「英語スピーカー」、「難民」＝「遠い世界のこと」、「自分の気が付かないこと、知らないこと」＝「この世には存在しないこと」という狭い視野で生きている。授業で教わることを、勉強の枠を超えて自ら学ぼうとする生徒は少ない。そのため難民認定を受けることができず、苦しみ抜いている家族が身近に

いることに気が付くことで、難民問題は自分たちの問題だと考えさせたかった。排他的で利己主義な許容力のない社会になりつつある日本（世界的にも）で、生徒たちの心を耕し他者を受け入れる平和の種をまき、彼らが自走するまで様々な「水や肥料」を与えたい。それが私の「総合的な探究の時間」に対する目的だった。

年間計画ではまず、難民についての学習を実施し、次に生徒はリオオリンピックの難民選手団の1人に光を当てた映像から学んだ。さらに UNHCR 日本協会のご協力を得て、学習を段階的に深めていった。そして満を持した形でシリア難民講演会を実施した。講演を聴くだけでは受け身になってしまうので、生徒の自発的な発言や発想を引き出すため、生徒が参加するパネルディスカッションを講演の後に実施した。司会は私が務め生徒の話を引き出すことにした。シリア難民の彼は日本語を理解する事ができたが、彼と私の希望によりあえてアラビア語とクルド語の日本人通訳者を探し当日同席してもらった。この企画の効果は絶大だった。生徒は初めて今は難民であるシリアの方に出会い、アラビア語を耳にし、通訳者の仕事を目の当たりにした。それだけでなく、難民当事者との直接の対話を通じて彼の穏やかな口調の中に悲しみの目を感じ取ることができた。パネルディスカッションや質疑応答は、質問を打ち切らなければならないほど盛況であった。この講演会后、彼のレストランに足を運び「もっと話がしたい」と申し出た生徒が出てきた。生徒の中には、韓国や中国、アメリカにルーツをもつ生徒も珍しくない。そのうちの一人が自身の体験を彼に重ね、できることはないかと相談しに来たこともあった。シリア難民当事者に接したことで生



難民の方による講演会

徒の心が動き、行動に繋がったことの表れだった。この実践から、人は頭と心で問題をとらえることができれば行動に移せる事を私は学んだ。

最後に、私はこれからも日々の教育活動を通じて生徒の固定概念を柔らかくし、今の高校生が将来許容性の高い社会作りの担い手となるため、様々な企画を計画したい。

普通の学校でも取り組める国際交流

千葉県立国分高等学校 教諭

大塚 雅信

本校は、国際科を設置していない普通科の高校であるが、この10年間で国際交流に関わった国は、10を超える。それは、普通科でも実施できる国際交流である。こうした交流の幾つかは、千葉県や市川市など地域の交流団体を通して、実施したものである。本校は、ここ6年間、アメリカ合衆国の短期留学生を受け入れており、授業で留学生と学校周辺にある石碑や石仏を見たり、寺院や神社をまわったりしたこともある。学校の屋上に上がれば、学校周辺の地域を一望できる。本校からは、東京スカイツリーを目にすることができる。日本のごくありふれた様子を見せることは、ありのままの日本を紹介することになると思う。書道、茶道、華道そして剣道、柔道などの部活動を体験してもらうことは、日本文化紹介の良い機会となる。

外国の方の訪問を受け入れる際は、学校をあげて取り組むことになるので、校内の受け入れ体制の構築が大事になってくる。対外的な関係よりも校内の体制づくりに労力を割かれることも多い。国際交流については、職員間の共通理解をつくっておいた方がよい。また、文化祭、体育祭など学校行事の写真を記録しておくことで日本の学校生活を紹介するのに役に立つ。お正月、ひな祭り、子どもの日、七夕、盆踊り、秋祭りなど年中行事の写真も撮影しておくことよい。もちろん、生徒達に日本紹介をさせることを忘れてはならない。生徒には、国際交流の機会を提供していく。そうすれば、それに応える生徒が出てくる。こうした日本紹介の活動は、こちらが日本文化について改めて学ぶことにもつながっていく。そして、日本文化について私たち自身が知らないことが多いことに気が付くことになる。国際交流は、相手国の人と交流することを通して、その国の文化や人々を知ると同時に自分の国を再発見することにもなる。それから、欧米文化圏の人たちにとっては、日本、中国、朝鮮半島など東アジア圏の文化は、区別がつかないことが少なくないようである。これらの文化については、共通点、相違点を説明できるようにした方がよいと思う。本校が取り組んで

きたのは、短期の国際交流であるが、たとえ短いその場限りの国際交流であっても、播いた種が大きく成長することがあると思う。そうした実例は、一つや二つではない。例えば、日本での留学経験があり、現在日本で働いているある中国人が日本と深くかかわるきっかけは、彼女が高校生の時に短期で日本を訪れ、周囲の日本人に大変親切にしてもらったことだそうだ。2015年に本校を中国の高校生と半日だけ交流した生徒は、次のような感想を書いている。「ニュースで中国の事を見て、中国人のことをある種の偏見で見えていました。でも、実際に中国の学生と交流してみると、そんなことを思った自分がとても恥ずかしかったです。実際に中国と日本はあまり仲が良くないですが、日本と中国が対立しているからといって、その国の人を嫌いになったり、偏見をもったりするのは、違うのかなと思います。人を人として向き合うことはとても大切です。そんな当たり前のことに気が付くことができたのも、今回の交流プログラムのおかげだと私は思っています。海外の学生と交流すると、ふだんは忘れてしまう一つ一つの出会いを大切にしたいという気持ちを毎回強くします。私はこれから、大学生になってからもたくさんの国の人と交流して多くの価値観を共有してたくさんの事を学びたいです。」

私は、現在の勤務校に赴任してから、台湾、中国、韓国といった日本の周辺地域や国との交流を経験してきた。こうした日本と近い所との交流は、とりわけ意味があるだろう。まず日本を取り囲むアジア・太平洋の地域との絆を構築していくべきではないか。本校の生徒も、台湾修学旅行だけでなく、東南アジア諸国の海外派遣に応募し、参加したこともある。2019年にミャンマーの方が、本校を訪れる機会があった。授業で、生徒にミャンマーについて調べた事を発表させ、ミャンマーの方に見ていただいた。こうした交流は、私たちの視野を広げてくれる。また、国際交流は、試行錯誤の繰り返しだと思う。失敗することや後悔することも多い。しかし、その失敗は、次の交流に活用できる。国際交流は、創造的な教育活動だと言えるのではないかと。



ミャンマー人と授業で交流

ユネスコスクール校長として取り組んだこと

ESD,SDGsを推進する手島利夫の研究室 室長

江東区立八名川小学校 前校長

手島 利夫

私はユネスコスクールの校長職を、2005年度以来、2校の小学校で13年間続けました。その間、ESD推進における最大の課題は、全校体制の確立とESDの持続でした。

つまり、校長が替わってもESDが立ち消えることのないような継続的な学校づくりです。そのためには主に、次の3点から取り組みました。

1点目としては、校長自らユネスコスクール・ESD、SDGsの研究会に参加し、世界的な視野に立った教育のあり方に理解を深め、小手先の工夫でない、大きなゴールに向けた学校経営のあり方を模索しました。そのことが、様々な方々とのつながりを広げ、発信や連携の幅が広がり、価値ある教育に向かう原動力となりました。また、韓国への教育視察団に加わり、「日本の教育の現状」を外から眺める機会をいただいたことも、そして視察に同行した国内の先生方と豊かな情報交流の機会を得たことも、自分の成長につながったように感じました。その実感があつたらからこそ、自校の職員を国内の研究会に実践発表者として送り出したり、海外の教育視察団に次々に推薦し、送り出したりしてきました。その結果、校内に視野の広いスーパー教師が育ち、教育も充実しました。そして日本中、世界中からの教育視察団等が次々に来校するようになり、子どもたちは交流の喜びの中で育つことにもなりました。教師の(国際)交流は子どもの成長につながるのだと実感しました。

2点目として、ESDの目標や視点を重視しつつ、学習指導要領を踏まえた教育課程の編成に努めました。多くの学校の教育目標や基本方針は、今でも「知・徳・体」を中心に確かな学力を身につけさせることに終始しています。私の着任した2つの学校でも同様でした。「自ら考え進んで学ぶ子」を「自ら学び、考え、行動する子」と変えるには、実績と勇気が必要でした。100年の歴史と伝統に育まれた教育目標を自分の代に勝手に変更していいのかと、遠慮や戸惑いもありました。

しかし、今ならば言えます。世界が激変し、求められる教育や子どもの姿が変わっている中で、価値ある教育の実現に向かって舵を切るのは校長の役目です。学習指導要領の前文・総則が変わったのです。「持続可能な社会の創り手」の育成が掲げられ、教科横断的な学びを編成(カリキュラム・マネジメント)し、主体的・対話的で深い学びに向けた授業改善を通じて、思考力、判断力、表現力、学びに向かう力や人間性を高め、何の価値もなくなったのです。地域の多様な資源を学習過程に組み込んだ、社会に開かれた教育課程づくりを進め、探究的な学習過程を通じて指導し、言語、情報活用、問題発見・解決等の能力を高め、生きる力を育む学校教育を創ることが求められているのです。これら(下線部)のキーワードをきちんと取り込んだ教育課程を職員とともに工夫し、ESDの研究・実践・発信・交流を通じて社会の変革を実現するのが、これからの学校教育のあるべき姿です。

3点目として、校内組織の中にユネスコスクール担当、あるいはESD推進部を設け、ユネスコスクールに関する情報の収集や渉外、発信や校内周知等の役割分担をしました。そして、研究推進委員会と連携を図りながら、校内共有データの中に、年度ごと、学年毎、単元ごとにESDの授業用資料の蓄積を進め、その活用を通じて、少しの工夫で前年度の実践を越えた優れた授業に改善できる基盤を作ったのです。ESDカレンダーや指導案だけでなく、子どもたちの探究活動の様子や、ワークシート、その記入例、保護者・関係機関に宛てた依頼状やお礼状、関係機関や関係者の連絡先等に関する情報も重要でした。これらを年度ごとに蓄積することで、一人では到底取り組むことのできない授業改善や教育の改革が実現できたのです。

また、全体として、誰の意見にも耳を傾け、特に自分と異なる考えの方々の思いも大事にするように心がけました。民主的で温かな学校風土はESD推進には欠かせないものと考え、大事にしてきました。それがみんなの力をまとめ、方向付ける大きな原動力になったように思います。



校内共有フォルダ上に学年・単元ごとのデータフォルダを作る

Check! >>> ESD,SDGsを推進する手島利夫の研究室 <https://www.esd-tejima.com/>

「繋がりを求めて」そして「繋がりを維持して」

東京都立王子特別支援学校 主任教諭
町田 直美

「未知の文字をもつ言語を学ぶことで、学習障害をもつ子どもの気持ちを理解したい」という思いで韓国語を学びはじめ、交流の手がかりになる繋がりを作ろうと2015年8月、韓国派遣プログラムに参加した。それ以来、繋がることのできた韓国の先生を通して、2019年8月までの5年間、毎年韓国の学校に出向き、小学校では日本文化を紹介する授業を行い、特別支援学校では日本から持参した教材の紹介を行った。2017年から2019年には、私が当時勤務していた支援学校に韓国の先生を受け入れ、直接交流を行うこともできた。



濟州島の小学校にて（七夕紹介）

2019年夏、韓国の特別支援学校の先生から依頼を受け、特別支援教育に携わる先生方を対象にしたワークショップに、講師として出向く機会があった。韓国語を勉強中とはいえ、韓国語で一から十まで説明できるわけではなく、ワークショップでは言葉を多用せずに、特別支援教育の支援方法の一つ、『見せて伝える方法』で行った。これは、これまで、韓国の小学校で交流授業を行った際、手ごたえを感じた方法でもあった。予め、視覚教材を準備し、説明を行う際に4つのフレーズ（右

ページ下を参照）を用いる。これだけで、言葉の壁を超え、心の距離が近付き、授業を円滑に展開することができた。

2020年夏に日韓特別支援教育交流（ワークショップ）、2021年冬に韓国の小学校での交流授業を計画していた中のコロナ禍で、今年は韓国に出向いての交流が実現できなかったが、韓国の先生方との繋がりは切れることなく、コロナ禍であるからこそ、カカオトーク等で、お互いの健康を気遣う日々が続いている。また、ワークショップで一緒に作った教材や私が届けた手作り教材が、韓国の特別支援学校の授業で活用されている写真や実践報告が届き、教員間交流の力が、国を超えて、子どもたちの成長を促していることも知ることができた。

出向く交流、受け入れる交流、そして、コロナ禍でのオンライン交流と、交流の形は様々だが、交流を維持するためには、お互いがお互いを思い、日々、繋がり続けていくことが何より大切であると感じている。



韓国で行われた特別支援教材作成ワークショップにて

『見せて伝える方法』

語りかける言葉は最小限 視覚教材を重要視

- | | | |
|---------|---------|--------|
| ① 視覚支援 | これを見て | 이거 보세요 |
| ② モデル提示 | このように | 이렇게 |
| ③ 机間巡回 | どうですか | 어때요 |
| ④ 評価 | よくできました | 잘 했어요 |



紹介した教材の一部が
韓国国立特殊教育院の書籍に掲載された

Thai and Japanese nursery school exchange ideas meeting on-line

社会福祉法人聖愛学舎 もみの木保育園長峰 看護師
物井 タリニー

私は 2002 年より日本の保育園で看護師として勤務しています。出身はタイ北部のカンパーペットという町で、ユネスコの世界遺産に登録されている古い遺跡がたくさんあります。さて、保育園の ESD 活動の中で子どもたちにタイ料理とタイの事を話す機会がありました。子ども達は予想以上にタイに興味を持ってきて、タイの子ども達と実際に話したいと大いに盛り上がりました。そこでオンラインでの国際交流を企画することにしました。

実際の交流の前にもう少しタイのことを知ってもらいたいと考えてまず、「ようこそタイ王国へ」というイベントを実施しました。ここではタイの習慣、文化を知ってもらうために3つコーナーを設置しました。1つ目のコーナーはパワーポイントを使ったタイの歴史や文化についてのお話しです。2つ目のコーナーは象に乗って寺院観光がテーマで、ひとりずつ象の形の乗り物でペーパークラフトの寺院と町並みを回りました。3つ目のコーナーはタイの舞踊でタイの伝統的な舞踊を実際に踊ってみました。この日はさらに給食にもタイ料理の献立を盛り込んでもらいました。

子ども達はとても楽しんで参加し、興味を持ったことについてタイはあつい?さむい?どんなどうぶつがいるの?など、沢山の質問があがりました。



タイのお話コーナー



タイの舞踊コーナー

次はいよいよ Zoom によるタイの保育園とのオンライン交流会です。タイの保育園と日本の保育園の行事などをパワーポイントを使ってお互いに紹介して、子ども同士が質問と意見交換をするという計画でした。前日からオンライン接続のテストを行い担任とも綿密に内容を打ち合わせして当日を迎えました。

当日は担任が保育園での取り組みを話して和太鼓やクリスマスの降誕劇などを披露しました。タイの保育者からは日本の子ども達が次々と質問をして積極的に関わる姿に、主体的な学び active learning の実践がなされており、是非指導の仕方を学びたいとの話もありました。また、お互いに他国を知ることにより改めて自分の国を見つめる機会にもなり、これが国際交流の素晴らしいところだと実感しました。(交流会は 2020 年 9 月～ 11 月に合計 4 回実施)

以前 ACCU の実施したタイやインド教職員招へいプログラムの交流会で出会った方もオンラインで交流できれば、お互いに良い学びの機会になると思います。本来、子どもは一緒に食べたり遊んだりしてお互いにコミュニケーションをとっていきます。しかし、オンラインの環境を準備して機会をつくることによって、遠く離れていてもそれが可能になることを実感しました。この交流会を通して子どもたちは友だちになりました。人生最初の外国の友だちかもしれません。そしてお互いに相手に興味を持ち、相手のことを知ることができました。それは、言葉も国境も乗り越えた相互理解の第一歩とも言えるでしょう。この子どもたちは将来、地球上の様々な問題を協力して乗り越えなくてはなりません。私たちもそのための環境を整えていきたいですね。



タイの保育園行事



意見交換・質疑応答

「親中派」でなくていい。「知中派」に！

名古屋経済大学 法学部 准教授

高橋 勝也

「中国なんか、・・・」というのは、実父からときどき聞かれる口癖である。子供の頃から耳にしていた私は鵜呑みにはしなかったが、多少の影響を受けてはいた。褒める意味合いではなかったのに、中国に対して良い印象を抱くことはなかった。大人になって自分で学ぶように試みたが、自分が親中派になることはなかった。

2019年に教職員派遣団の団長として中国を訪問する機会を頂戴した。どの施設へ行っても、熱烈な歓迎ぶりである。あまりに熱烈なので恐縮してしまうが、素直に嬉しい。そして、中国の先生方が日本に来られたときは、その倍ほどの熱烈歓迎でお返しすることを誓ったものである。日本の先生方がアジア諸国を訪れる。また、アジア諸国の先生方が日本を訪れる。そのキャッチボールの積み重ねで諸国の友好が発展していくことを身体で理解した。



どこに行っても熱烈な歓迎

やはり、現場に行かないとわからないことがたくさんある。日本で学ぶ中国、知る中国はどうしても複眼的になりにくい。現地の子供たち、先生方、あるいは庶民と本音で語り合うからこそ、日本で出会うことのない「知る」と巡りあえるのである。両国の友好、世界平和の実現を願うのであれば、私たちが親中派になるべきだという考え方がある。異なる感情を有する私たちすべての人間が親中派になることはまず、あり得ないだろうし、そう捉えるのが自然である。しかしながら、中国をこれまで以上に知ろうとすることは誰にでもできるに違いない。私たちが新たに知ること、相手を好きになるかもしれないし、嫌いになるかもしれない。好きになったとしたら、親中派と言えるのかな。もし、嫌いになったとしても、根拠なく毛嫌いすることはなく、複眼的な見方・考え方を身に付けたがゆえのことであると考えればいい。私はこれからを担う若い先生方に教職員派遣団の団員として中国やアジア諸国へ訪問することを絶対に、強く勧める。なぜなら、現地へ訪問することで「知中派」になることができるし、世界をこれまで以上の広い視野で知る可能性があるためである。私たちがもし、身構えてしまえば相手も身構えてしまうであろう。しかし、中国、アジア諸国の先生方はまったく身構えていない。それとは逆に私たちが飛び込んでくれることを待っている。これは行くしかない。



雲南省教育厅



芳草国際学校



昆明第一書林小学校

教職員の交流からSDGs協働支援活動へ

名古屋経済大学市邨高等学校 教諭
松野 至

私は、2019年度「韓国政府日本教職員招へいプログラム」に参加させていただきました。プログラム終了後、訪問先の水原^{スウォン}外国語高校との教職員交流を継続しました。そして、両校の生徒による文化交流会実施につながりました。コロナウイルス感染拡大による学校休業時にも交流を続け、両校が協働した国際支援活動へと発展しました。



水原外国語高校訪問時の様子

学校の枠（国境）を超えての生徒の交流は、生徒が他者との対話を促進させ、考えを深化させる機会へと繋がりました。そして、多様性を身につけ、より良い社会の実現に向けて考え、行動する探究活動となりました。

○オンライン文化交流会の実施 ～2019年11月 高校生による発表会～

2019年度「韓国政府日本教職員招へいプログラム」によって、両校は連絡をとりあうことが容易となり、高校生の文化交流会を実施することになりました。文化交流会当日は、両校それぞれ3グループずつ発表を行いました。後半の質問会では、参加者からたくさんの質問が出され、予定を延長して交流会が続きました。

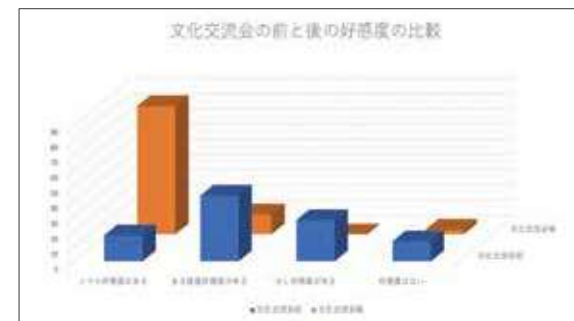


水原外国語高校と市邨高校のオンライン文化交流会の様子



言語分析の結果

本校では文化交流会の前後に、ICT（iPadと協働学習ツール「AIAI モンキー」）を活用した匿名による意見集約・協働学習を実施しました。生徒の実施後の感想では「仲良く」「楽しい」といった前向きな言語が多く使われ、相手国への好感度の意識調査（文化交流会前後の比較）では、大きな変化を確認することができました。



交流会前後の好感度の変化

○「優しさを繋げる探究活動」実施 ～SDGs 協働支援活動へ～

本校ではコロナによる臨時休業中、世界の NGO 等と Zoom を使ったオンライン学習を行いました。生徒たちは「自分たちにできることは何か」を考えました。そして、手作りマスクをカンボジアの貧困地域に送るプロジェクトを考えました。水原外国語高校とも連絡をとり一緒に取り組みました。日本全国の皆様、台湾^{ホウサン}鳳山商工高校の皆様からも応援をいただきました。韓国から日本までのマスクの輸送については、国境閉鎖の状況でしたが、水原外国語高校の関係者皆様の力添えをいただいたことで、本校に無事にマスクが届きました。その後、カンボジア貧困地域にマスクを郵送することができました。韓国・台湾・日本の高校生で報告ムービーを制作しました。



水原外国語高校からのマスク

未来を担う生徒のための教育交流事業は、絶え間ない努力の末、今日に至っています。これからも、先人達が築き上げてきた国際平和の基盤を生かし、生徒と直接関わる教育関係者だからこそできる平和活動とは何かを考え、ESD を推進し「平和」に貢献していきたいと思います。

学びにおける「ボーダーレス」の視点

京都市立修学院中学校 教諭

大栗 真佐美

はじめに

1992年から京都市立学校や京都教育大学附属桃山中学校において帰国・外国人児童生徒等の教育に携わってきたことから、様々な外国人教育・国際教育を実践してきた。

例えば当時の勤務校がESDの研究をしており、総合学習や英語、国語などの授業を使って2015年度アートマイル国際交流壁画共同制作プロジェクト(文部科学省・外務省後援事業)に参加した。具体的にはインドネシアと台湾の学校に在籍する児童生徒とICT(スカイプ等)を活用して共通の学習テーマで国際協働学習を行い、学習の成果を絵にして1枚の壁画を制作した。このことは学習者と教員の双方にとって有益な経験となった。

教職員招へいプログラム参加後の取組から

2017年5月の「国際教育交流事業中国政府日本教職員招へいプログラム 北京・安徽省・上海」参加後は、特に以下の2つの点に着目して授業などを行っている。

①「図書館教育の推進」

視察した安徽省合肥市屯溪路小学では「図書館中の学校」(図書館の中にある学校)として、①図書館(学校)、②学級文庫(学級)、③キャンパス図書コーナーの設置(廊下)、図書館担当2名と学級担任による読書を中心としたカリキュラム作り、④カバンの中(個人)の活動が行われていた。読書離れが進む日本においても、この取組みはとても有効であり、学習者が「どこでも気軽に本を手に取り読める環境づくり」は大変参考になった。

②「読むこと」を中心に置いた漢文授業

2017年度は京都教育大学大学院に現職教員として在学中だったため、今後教員を目指す学生へも中国の教育事情などを知ってもらおうべく、授業を行う時間をいただいた。

安徽省合肥市第五十中学校では、国語科で学ぶ中国古典の学習について教員から直接学んだ。「読むこと」を中心に置いた学習の取組みは多くの学校で実践されており、学習者が暗唱や劇を行うなどして多くの作品に親しんでいた。特に中国政府が推進してい

たのは優秀な中国古典文化を学ぶ活動である。これらの活動を参考にして以下の取り組みを行った。

日時：2018年11月22日京都教育大学附属桃山中学校研究発表会『論語』の実践

指導学級：2年4組 16名(帰国生徒教育学級)

単元名：伝統を見いだす 孔子の言葉を考えよう

	時数	学習内容
第1次	3	※10月末から本時まで『論語』の朗読 (30章) (毎時間5分:付箋に考えたことを書き、次の時間にクラス内で交流) 徒然草:「つれづれなるままに」序段、「仁和寺にある法師」52段、「いい友、わるい友」117段
第2次	2	漢和辞典の調べ方、同じ訓、同じ音をもつ漢字
第3次	4	『論語』「益者三友、損者三友」と『徒然草』「いい友、わるい友」(友とするにわるき者)について、時代を超えた繋がりについて考えよう

『論語』は日本に最も古く伝来し、広く享受されてきた漢籍の1つであり、日本人のものの考え方(倫理、思想、学問)に大きな影響を与えている。また、長期にわたって教科書教材として掲載され、近年では小学校でも学ぶ。

中国では学習者は『論語』の書籍を1冊持っており、その中の章句に関して自分が感じたことや言葉の中の意義について考えることが多いと教職員招へいプログラムの教員交流では教えていただいた。

そこで、上記の取り組みでは『論語』について多読し、さらに『徒然草』学習へとつなげた。その結果、学習者が古文の中に息づく漢文の言葉に触れ、時代や国を超えて言葉が生き続けているという「漢文の価値」を感じ、伝統的な言語文化の継承を認識する機会となった。

おわりに

この交流で、日本や中国という国を超えて、私は教員として「学び」とは何かを考える機会を得た。この経験によって得た視点は「ボーダーレス」であった。すなわち学ぶことや教えることには国境や時代の差はないということである。この視点は、これからの教育について考えていくうえでも重要ではないだろうか。コロナ禍の中海外とも行き来できない時代を生きる学習者にとっては、お互いの考えや文化等を理解する学習をする時間は特に重要なこととなっている。学校で学んだことが学習者にとって、生涯において自らを支える礎となってほしいと願っている。

教職員の国際交流を活かすということ

国立大学法人岡山大学教育学部附属中学校

教諭/研究主任

竹島 潤

教職生活も早いもので18年目となる。この間、多くの留学生や在住/訪日中の外国人青年たちと交流を重ねてきた。その経験をもとに、これまでの勤務校では常に、国際教育の一環で地元留学生の方々などをお招きしての七夕会やクラス交流会などを実施してきた。3年前に現任校に赴任してすぐ、英語科研究室の同僚たちとともに“International Meeting”(通称IM)を立ち上げた。初年度は冬のみ試行実施した。1-3年の有志生徒たちから成る準備委員会を立ち上げ、当日のプログラムやディスカッションのテーマを検討した。地元NPOや岡山大学と連携して招聘したゲスト留学生と有志生徒たちは、自己紹介、アイスブレイク、ディスカッション、スナックタイムなどを通して、次第に緊張感を和らげ、最後には友達のように英語で会話したり、グローバル課題について意見交換するなど、全員の満足度が高いものになった。円形段ボール「えんたくん」という参加型ワークショップで用いるアイテムを活用したこともよかった。



初開催となった IM2018



大盛況だった IM2019

次年度からは夏と冬の年間2回実施し、異学年交流の効果や通常の英語授業との繋がりも生かしながら取り組んでいる。そして、3年目の今夏…新型コロナウイルス感染・蔓延予防の中でリアルな国際交流事業が懸念されることとなった。しかし、私たちにこの取り組みを継続することに一切の迷いはなかった。こうした時こそ、人と人のつながりや多文化共生の体験を通して、コミュニケーション力や思いやり、そして将来

への夢を磨いてほしいと思ったからだ。そこで、急遽本校初のオンライン会議システムZoomを活用した交流会“IM ONLINE”とすることにした。既参加の留学生たちに加えて、頼れる参加者のひとりがACCU初等中等教職員国際交流事業のグループ仲間、Audy先生(タイ/ベンジャマ・マハラート学校)だった。半年ぶりにオンライン会議で“再会”を喜び、当日に向けた準備を進めた。ACCUの国際交流事業参加経験のある先生方は、国際交流を単なるイベントではなく、教育交流とすることの意義を共有している。その信頼と安心感は大きかった。当日はAudy先生を含むゲスト講師の皆さんが、生徒たちとオンラインでの全体交流、複数教室でのグループ交流を通して、楽しく英語で会話したり、画面越しにレクをしたり、お互いの国の文化を写真や絵で紹介し合ったりしていた。特にタイ、ミャンマー、フィリピン、ブルネイなどの国外ゲストとリアルタイムで繋がることができ、生徒は興奮していた。今後も再会できた先生とのご縁をいかし、日頃の英語授業内でのオンライン交流や学校間交流、生徒相互訪問などを目指したいと考えている。思うに、国際交流は教職員自身が生徒や海外ゲストの方々と共に楽しみ、継続的に取り組むことで、説得力も効果も上がるものだ。2019年度、私はユネスコスクール加盟申請中の現任校で、今後のASP-Netを活用した海外交流を見据え、インドおよびタイから招聘されていた各教職員招聘プログラムの先生方と交流する機会を得た。いずれの先生方も、国や地域を代表され、経験やモチベーションの高い方々ばかりであった。前述のAudy先生に加えて、この時に知り合ったPom先生(タイ/ナーク・ラセーン・スックサー学校)やSantosh先生(インド/Navodaya Vidyalaya Samiti中等学校)とも、SNSやメールでの交流を続けている。ぜひ、次回のIMにはゲスト参加していただこうと考えている。



IM2020 オンライン開催 (全体会)



IM2020 オンライン開催 (グループ交流)

現任校では、他にもウガンダの聖歌隊ワトト、マレーシアから研修旅行で来岡する高校生たち、中国やロシアなどからの日本語学校生徒さんとの交流など、学校や学年単位、英語授業を活用した国際交流に取り組んでいる。それぞれに良さがあるが、私は、これまでの教職員国際交流のネットワークと異学年交流を伴うこの“IM”はとりわけ好事例だと思っている。

「わくわくする学び」を子どもたちとともに

徳島県上板町立高志小学校 教諭

富樫 未来

『子どもたちに数学の楽しさを知ってもらうための授業はどうすればいいだろう』『どのような練習をどのぐらいすれば、バスケットのスキルが上達するのだろう』国際交流プログラムに参加する前の私は、専門教科の数学と部活動で受け持つバスケットボール部のことを考える毎日をご過ごしていました。これは、教師として当然のことであり、このことについて疑問に感じることも大変だと思うことは一切ありませんでした。これらを考えることは、私の生活の一部になっていました。しかし、この生活がプログラムへの参加により、一気に変化することになったのです。

私がプログラムに参加するきっかけは、当時の校長からの「あなたは数学とバスケットしか知らないから、もっと世界を見て勉強してきなさい。」という一言でした。当時、小中交流で中学校から異動してきたばかりの私は「そう言われても…。数学教師だしバスケットボール部の顧問だからそれでいいと思うけど…。」という気持ちがありましたが、言われる通りに参加しました。それまで海外について全く興味がなかったのに、実際に降り立った瞬間、「ここではどんな出来事が待っているのか…」と期待で胸がいっぱいになりました。現金なものです。

北京に着いたときは、資料やテレビで見た中国の町の様子が、今目の前に本物として見えていることに感動しました。見るもの全てが「中国」でした。訪問した学校では、生徒が60人いる教室、立ちながら筆を進める書道の授業など日本にはない学校の光景を目にしました。日本との違いに驚きながらも、日本と変わらないものを見つけることができました。それは、先生たちが抱いている子どもたちへの想いです。どの先生も、子どもたちの力を伸ばそうと様々な工夫をしていました。言語は違いますが、子どもたちに対する想いは伝わってきました。

この一週間の中国研修が、私の考え方や価値観を大きく変えてくれることになりました。まず、海外に行かなくてもいいという考えから、一度は必ず行くべきだという

考えに変わりました。様々な文化、環境での生活を知ることが、地球で生きているすべての人々にとって必要です。私が実際に見ることができたのは、ほんの一部分ですが、それだけでも自分自身の生き方と向き合い、周りの人たちとの接し方が変わりました。以前より優しくなった気がします。

そして、何より感じたのが自身の価値観の変容です。それまではこの文章の冒頭にあるように、方法ばかりに目を向けていました。子どもたちに対しても、私が正しいと思う枠組みの中に無理矢理入れようとしていたと思います。しかし、世界を見てきたことで、方法より目的を考えるようになり、枠組みの中に入れてしまっただけでは子どもたちの良さを伸ばすことができないと思うようになりました。また、教育に関する考え方も変わりました。子どもたちが分かるように教えるだけでなく、【わくわく】して自ら学びたいと思わせるものを準備することに力を入れるようになりました。これは中国研修での体験から分かったことです。私にとって初めての海外となる中国研修では、見るものすべてが初めてのことで、わくわくドキドキしっぱなしの一週間でした。知らないことや分からないことだらけでしたが、自分で調べたり聞いたりしながらたくさんのことを学びました。この経験が、私の人生に変化を与えてくれました。今では、未来を創る子どもたちに、このような『【わくわく】する学び』を与え続けることが私の使命だと思っています。

研修から2年以上たちましたが、『【わくわく】する学び』に向かって今も私は進み続けています。昨年は、タイの先生方と交流する機会をいただきました。また、自ら行動を起こし、日本とネパールの学生の交流を行うこともできました。現在も子どもたちとともに、今までにやったことのないことに挑戦しています。新しいことへの取り組みはいつでも【わくわく】しますし、失敗もします。しかし私は、失敗を恐れず、さらに【わくわく】するものに変えていける強さを国際交流プログラムから身につけました。その強さを武器にして、これからも子どもたちとたくさんの【わくわく】を見つけ続けます。



タイの先生方との交流

Check! >>>

高志小学校の総合的な学習の活動「藍」の紹介ページ “Indigo Takashi”
<https://www.facebook.com/indigo.takashi.9>

スペシャルインタビュー

～地域とともに～

誰一人取り残さない 多文化共生図書館運営

MASAO YONEDA

米田 雅朗 氏

新宿区立大久保図書館 館長



この企画は、元公立中学教員の私が4年前に放送された米田館長の取組を特集したNHKの番組を拝見し、その行動力とお人柄に惹かれてぜひ一度お話を伺いたいと切望していた思いから実現しました。外国につながる子どもが多い地域の教育機関に勤務している教職員にとって、地域の図書館と日常的な協力体制を築ける事は大変ありがたく、また重要です。外国につながる子どもの少ない地域の教職員の方にとっても、地域との関わりという意味でたくさんのヒントを得られると思います。(聞き手: ACCU小澤)

大久保図書館がある街、新宿区大久保

ACCU：近年、外国につながる子どもが日本で増える中で、ACCUのプログラムに参加する先生方の中でも対応について課題を感じている方がいます。大久保図書館では様々な団体と連携なさっているという事で、教育現場も学校だけで完結させず地域の中で子どもを育てるため、図書館や公民館の位置づけは非常に大きいと考えています。まずは、大久保図書館の地域環境を教えてくださいませんか。(注1：新宿区住民基本台帳人口)

米田館長：当図書館から道を挟んだ向かいに大久保幼稚園を併設した小学校がありますが、ここは全校児童約170名のうち半数近くが外国につながる子どもです。そのため日本語国際学級を設けています。幼稚園には現在7か国の外国につながる子どもが在籍しています。ここの園児たちは毎月一回散歩コースで図書館カードを持ってうちに来ます。職員が2冊絵本を読み聞かせた後、園児が好きな本を2冊借りていきます。逆に年に一回こちらがお邪魔して、中国語と韓国語で絵本を読む「出張おはなし会」もしています。隣りの百人町にある百人町保育園でも同様の取り組みを実施しています(現在はコロナで中止とのこと)。幼稚園の先生からは、当図書館に外国語の本がたくさんあるので本当に助かると言われます。幼稚園・小学校との連携という部

分では、どうしてもアジア系の方が多いためアジアの本を集めていましたが、ある時南米の子どもが入園したことをきっかけに洋書を扱っている本屋でスペイン語の『はらぺこあおむし』等を何冊か買い用意しました。このように幼稚園とは、連携が常に密にすることができており、お互いに信頼しあう関係になってきました。

誰ひとり取り残さない図書館

ACCU：子どもが図書館から借りた本を持ち帰り、家でそれを読む姿を保護者が見たら安心しますよね。

米田館長：ある外国の方が、1冊でも自分の国の本があると、自分が街に受け入れられている気がして嬉しいとおっしゃっていました。その意味で1冊でもやはり大事です。日本に来てなかなか自分の国の言葉に触れる事ができないところに、自分の国の言葉で書かれた絵本が1冊でも2冊でもあれば、絶対にその子どもにとっては嬉しいと思いますし、保護者にとっても嬉しい。だから1冊ですけど、実はこの1冊が10冊、20冊に匹敵するのだと思っています。ですから、できるだけ色々な言語の本を用意したいと思っています。

ACCU：その一冊を図書館の棚に置いておくという行為が、それを必要とする誰かへの温かなメッセージになるのですね。まさに「誰一人取り残さない図書館」です。2030年までに達成しようと国連で定めたSDGsに通ずる理念です。(注2：SDGs参照)

一冊の本が棚に並ぶまで

米田館長：図書館の内部事情になりますが、本を所蔵するためには書誌データ入力作業が必要です。本屋から買う場合は書誌データが送られてきますが、例えばタイ語の絵本を寄贈で頂いたとしても、書誌データがタイ語で書かれていると読めません。まずは、新宿区の翻訳通訳ボランティアの方にお問い合わせできるか確認しますが、対応可能な方がいない場合は、日本語学校に連絡して書誌データや奥書の翻訳ができる方を探します。そのような方が見つかった場合は、図書館に来ていただいてデータの入力をお願いします。これで晴れて大久保図書館の所蔵になります。善意で外国語の本を寄贈頂く事は本当にありがたいですが、すぐには本棚には出せないという状況が発生してしまい、翻訳できる人を探して随時加わってもらってきました。そうした作業が進んだお陰で現在は31言語2,500冊所蔵となりました。(注3)

ACCU：多くの方の善意のリレーによって、一冊の外国語の本が棚に並ぶのですね。先ほど館内をご紹介いただいた際にも、多文化図書推薦カードとコーナーがとても印象的でした。この取り組みを始めたきっかけを教えてくださいませんか。

米田館長：当館は2010年から指定管理運営(注4)をしております。紀伊國屋書店・ヴィアックス共同事業体のうち、私はヴィアックスに所属しております。大久保は外国の方が多い地域なので、多文化サービスに力を入れるという趣旨で始めました。2011年度の途中から私が館長になりまして、まずは幼稚園の先生方からご要望をお聞きして外国語の本を積極的に入れ始めました。



ACCU：外国の図書は、日本の本に比べれば高いのではないかと思いますのですが、どのような方法で購入しているのですか。

米田館長：予算としては普通図書予算と別用途の特別予算があり、外国語の本は、特別予算で購入しています。英語・中国語・韓国語であれば、殆ど購入ルートが固定されていますが、例えばタイ語、ベトナム語、タガログ語の本をどこから購入するかは分かりませんでした。色々聞いて回って、専門で扱っている書店があると聞き、図書館と直接つなぎました。この書店は特にアジア系の本を多く専門に扱っていると知って連絡を取り、タイ語やミャンマー語の本の購入を検討していると伝えたところ、社長が直々にカタログを持って図書館に来られました。それからお付き合いが続いています。毎年そこから特殊な本、例えばモンゴル語やタミル語の本を買っています。

館長がつなげた他機関とのネットワーク

ACCU：この十年間様々な取組みを進展させてきた中で、特に成功したものは何ですか。

米田館長：成功した事は、様々な団体とのネットワークが広がった事です。これは大久保図書館の財産と言えます。新宿区では2か月に一回、多文化共生連絡会(講演や取組紹介、意見交換等実施)を開催していますが、私は常連です。また、大久保図書館のイベントの中で「ビブリオバトル・インターナショナル大久保」というものがありますが、これは外国の方が本を持ち寄り、一冊の本について熱く語り合う本を通じた国際交流です。今月(2020年10月)のスピンオフイベントでは、本ではなく思い入れのある物を日本の人と外国の人が持ち寄り熱く語るという行事を考えていました(コロナの影響でビブリオバトルもスピンオフ企画も来年実施)。様々な言語のお話会は来年も実施していきますが、中でもアラビア語のお話会は去年で五回目になりました。

エジプトの大学院に留学している方が、アラビア語を話せるのでアラビア語のお話をしませんかとお話を頂いた事がきっかけです。この時には、アラブ系の民族衣装の試着も行うのですが、民族衣装は桜美林大学の草の根プロジェクトからお借りました。また、ご近所の方との関わりという点では、例えば買い物で訪れたコンビニのレジで中国の店員さんと仲良くなり、その方が先日図書館に娘さんを連れて来られました。図書館に来てくださいというよりも普通の人間同士のつながりで来ていただいたような感じです。更に、日本語学校の校長先生から、地域のために何かしたいと相談を受け、日本語学校との協働で多言語のお話を始めました。例えばレバノン人やコロンビア人が1冊の絵本を1ページごとに母語と日本語で交互に読みます。これも一つの国際理解、相互理解というものです。司会も留学生の方が行きます。外国の方が入れ代わり立ち代わり自分の母語や日本語を話している姿を、子ども達は一生懸命驚いたりしながら聞いています。手遊びをスウェーデン語でやった事もありますよ。

大切な一人の人間として

ACCU：学校の教員が外国につながる保護者に対応する時にも、人間同士のつながりが大切ですね。ただ米田様のように実行できる方は珍しいのではないのでしょうか。

米田館長：一般論かもしれませんが「違っているものを認める、そして認めるだけではなく、尊重するという姿勢が大事」ですよね。一人の人間として大人として尊重していく。どうしてもこちらの感覚になりがちですが、相手に敬意をもつという事です。その姿勢をもっていれば特に子どもは心を開いてくれる。図書館には外国の子どもが来られますけど、できるだけ話して仲良くする事を心がけています。決して子どもとしてではなく、大人として、人間として尊重して接していくという事ですね。

ACCU：外国につながる等の異なる背景をもつ人を尊重する姿勢、一人一人が心の中にいつも留めておきたいことです。本日お聴きた事をヒントに、日本中の教職員や学校に関わる全ての人達が地域の図書館と日常的な連携ができればいいですね。ありがとうございました。



注1：新宿区住民基本台帳人口 外国人住民国籍別男女別人口一覧（2020年10月）
https://www.city.shinjuku.lg.jp/kusei/file02_00029.html または PDF

注2：SDGs
 国連加盟193カ国による8回に及ぶ政府間の交渉で策定され、かつ NGO や民間企業、市民社会の人々等も積極的に議論に参加し作られたもの。
 格差や貧困、気候変動をはじめ人々の生産や消費のあり方にまで言及した17ゴール169ターゲットという多岐にわたる目標が設定されている。
 （外務省 HP 「わかる!国際情勢」Vol.134 より抜粋）

注3：大久保図書館外国語資料所蔵数一覧（PDF）

	言語	一般書	児童書	絵本(児童書の内数)	紙芝居	合計
1	韓国	507	381	314	0	888
2	中国	509	233	202	0	742
3	ネパール	12	79	42	2	93
4	ベトナム	8	8	4	0	16
5	ミャンマー	6	2	1	0	8
6	タイ	6	40	33	0	46
7	タガログ	8	22	22	0	30
8	インドネシア	0	4	1	0	4
9	マレーシア	0	4	1	0	4
10	シンハラ	0	12	9	0	12
11	タミル	0	10	10	0	10
12	クメール	0	3	3	0	3
13	ウルドゥー	0	5	1	0	5
14	モンゴル	16	1	1	0	17
15	トルコ	0	5	5	0	5
16	アラビア	1	17	10	0	18
17	ベルシャ	0	3	3	0	3
18	英語	248	291	190	1	540
19	フランス	15	18	17	0	33
20	ドイツ	5	0	0	0	5
21	スペイン	1	35	25	0	36
22	カタロニア	0	9	6	0	9
23	ガリシア	0	1	1	0	1
24	ポルトガル	5	0	0	0	5
25	ギリシア	0	1	0	0	1
26	チェコ	0	2	0	0	2
27	ロシア	0	1	0	0	1
28	フィンランド	0	2	0	0	2
29	ノルウェー	0	1	0	0	1
30	デンマーク	0	1	1	0	1
31	スウェーデン	0	1	1	0	1
		1,347	1,192	903	3	2,542

注4：住民の福祉を増進する目的をもってその利用に供するための施設である公の施設について、民間事業者等が有するノウハウを活用する事により、住民サービスの質の向上を図っていく事で、施設の設置の目的を効果的に達成するもの。平成15年9月施行（総務省 HP 「指定管理者制度の運用について」より）

第3章

教職員国際交流事業のいま

日本 × 中国 オンライン学習

コロナ禍でもオンライン学習で知見を広げる

毎年日本と中国の教職員が互いの国を訪問し、各地の教育委員会や学校の先生方、地域の方々のご協力のもと交流プログラムを実施してきました。中でも中国派遣プログラムは、中国の先生方を受け入れる自治体の先生方にとって、中国の教職員を迎える前に自分自身の目で中国の教育・社会・文化等を体験する機会となりますが、2020年度はコロナ禍により対面交流は実現しませんでした。

日中間の対面交流プログラムの代替事業として、中国教職員の受入れを予定していた秋田県大館市教育委員会のご協力のもと、いくつかのプログラムを実施しました。その中から、2つの取組について当日の様子とご参加・ご協力いただいた方のご声をご紹介します。

文部科学省の専門家による「中国の教育事情」のオンライン講義

(講師: 文部科学省総合教育政策局調査企画課外国調査第二係係長 新井 聡氏)

従来の訪中前オリエンテーションで実施されている講義を、オンラインで体験していただきました。



受講の様子

【講義内容】

- ・ 中国の音楽（日本の音楽の教科書でもとりあげられている「茉莉花」）の紹介
- ・ 中国語会話練習
- ・ 中国の教育事情
- ・ コロナ禍における中国の教育政策 等

参加された小学校・中学校の校長先生の声(一部)

意義

- ・ 現地に行かなくてもおおよその把握ができたこと。
- ・ 交流国の教育について、知識が無いままに交流を進めることは、相手にとって失礼と考える。最低限の知識は必要であろう。
- ・ 校長が交流の意義を見いだせないまま、職員へ落とし込みはできない。やはり、組織の長がその意義を知っている必要は大いにある。

講義前後の変化

- ・ 受講前は、中国の教育事情については全くの白紙であった。管理的側面が強く、教育格差が大きいイメージがあった。
- ・ 受講後は、中国の教育は国家100年の大計だと政府が認識していることがよく分かった。「資質教育」や「創造性の育成」に重点が置かれており、人材育成という面では日本と共通した取組になっていると分かった。

中国からの留学生とのオンライン交流 - 留学生から学ぶ中国の姿

日本と中国の学校をオンラインでつなぎ、クラス間交流を希望していましたが、やむを得ない事情で実現できなくなりました。交流を楽しみにして下さっていた小学校・中学校の児童生徒さんが中国について学ぶ機会を確保したいと考え、2019年度ACCUのプロジェクトスタッフとして交流プログラムをサポートしてくれた北海道大学経済学院博士課程現代経済経営管理専攻 林麗桂さんにお越し、小学校6年生と中学校3年生に対して中国のことや日本への留学、将来のことを話していただき、林さんを通じて中国のことを知っていただくことにしました。



当日の様子

大館市教育委員会学校教育課 教育ツアーコンダクター(地域おこし協力隊)
近藤 英成氏からひとこと

普段はあまり海外の方と交流する機会のない子どもたちにとって、国際理解だけでなく、キャリアにおいても視野を広げる良い機会になったと思います。小学校においては、自分たちが学んだふるさと大館・秋田の良いところを林さんに紹介できたことや、中学校においては受験を控えているなか、中国から留学してきた林さんが歩んでいるキャリアを知ることで、自身のキャリア、受験する意味を見つめ直す機会にもなったと思います。

日本 × 韓国 オンライン交流

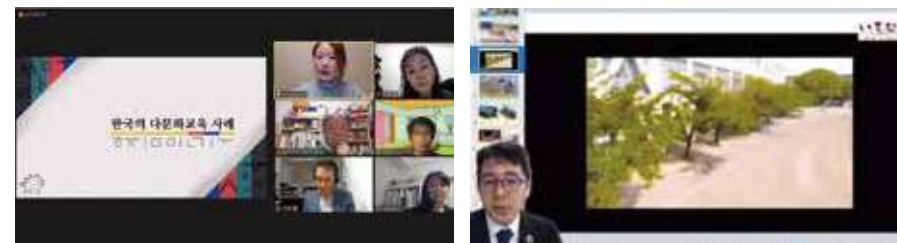
オンライン対話プログラム

例年夏に開催されている「韓国政府日本教職員招へいプログラム(韓国派遣)」。2020年は、新型コロナウイルスの影響により、韓国の先生方も交えたオンラインのプログラムとして、2020年10月11日から17日までのうち4日間にわたり実施されました。

日韓の教職員が自宅や職場からオンラインで議論に参加し、最終日にその成果を報告しました。参加者は小グループに分かれ、多様な側面から新型コロナウイルスによる感染症の流行拡大による影響、現在の状況にどのように対処していくかなどを議論しました。

各グループのテーマ

- 1グループ → ESD(持続可能な開発のための教育)
- 2グループ → GCED(地球市民教育)
- 3グループ → 異文化交流・文化的多様性
- 4グループ → 学校の学習環境における変化
- 5グループ → 教育者の役割
- 6グループ → 新型コロナウイルスによって起こった問題を克服するための学校を超えた取り組み



参加者の声

新型コロナによる制約があっても、子どもの良い点を見つけ、教職員の子どもに対する関心を表現することで、自尊感情を高めていくことが大切だ。

オンライン授業の利点を生かし、インターネットでの情報収集能力を向上させたり、翻訳アプリケーションの使用や各種ツールを駆使した発表に慣れることを促している。

韓国で、オンライン授業と対面授業を1週間ごとに交互に行っている話を聞いた。2通りの授業方法をスムーズに連結させることや、授業の準備は大変だと韓国の先生は話していたが、面白い取り組みだと思い、学校で共有した。

もっと、フィールドを広げたい!

日韓教職員交流20年目の新たな挑戦

2020年、コロナ禍で各種の国際交流事業がオンラインによって行われる中、ACCUは20年間継続してきた日韓教職員の交流プログラムで新しいことに挑戦しています。

本事業は、様々なバックグラウンドを持つ教職員が参加することを歓迎している一方で、実施期間や場所、スケジュールなどの制約から、一部の方にとっては参加が難しい状況があるという課題を抱えています。少しでもプログラムのフィールドを広げるべく、今年度は地理的な多様性に焦点をあて、韓国教職員招へいプログラムの一環として「アウトリーチ拡大のためのオンライン交流プログラム」を実施しています。

2020年10月から、日韓の島しょ部・山間部等に位置する小規模校に勤務する教職員6名および専門家2名とともに、オンラインでの会議を中心とした意見交換やノウハウ・課題の共有を開始しました。ACCUではこの取り組みを通して、現場の先生方の声やニーズを「誰ひとり取り残さない」教職員国際交流事業の運営につなげていきたいと考えています。

タイの先生の実践 日本との教育交流

新型コロナウイルスの影響下でも、日本との交流を続けているアディソン・ネティップ先生(Mr.Adirson Nettiip)からお話を伺いました。アディソン先生は、2019年度のタイ教職員招へいプログラムにより来日し、兵庫県と徳島県を訪問し、日本の教職員や児童・生徒と交流を深めました。

2020年、タイでは新学期前の時期*1でしたが、新型コロナウイルスが世界的に流行しはじめました。アディソン先生は、タイ政府が定めたポリシー(一定の距離を保つなど)に沿って、オンライン授業・学習環境を整えてきたと語ります。

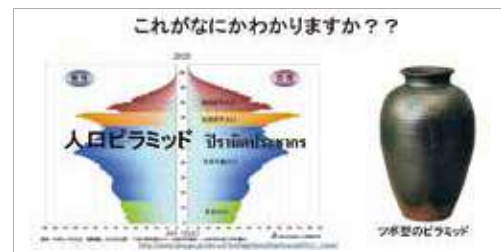
2019年末に日本を訪問して以来、タイ北部のチェンマイ県にある勤務先、Ban Kad Wittayakhom Schoolで、6年生の児童に対する補完的な学習として日本の大学院生の方にオンライン授業をしていただいた取り組みと、2019年12月に訪問した徳島県の小学校と行ってきた児童・生徒間交流についてご紹介します。(翻訳・編集:ACCU)



日本訪問時、小学校でタイの文化を紹介するアディソン先生

1 日タイ教育交流会での出会いから

2019年12月、タイ教職員招へいプログラムの中で実施された日タイ交流会に参加した広島大学大学院の学生さんに、日本の社会問題について講義をしてもらいました。本校には日本語の分かる教職員が在籍しているので、日本語で行われる説明をタイ語に通訳しながら進行了。日本の小学校6年生の社会科で学ぶ内容から「少子高齢化社会」をテーマとし、日本の状況を学びつつ、タイと比較してみるなどの学習を行いました。タイでも、10年から15年後には高齢化社会に突入します。日本の問題について学ぶことで、子どもたちがタイの未来を予測し、問題解決について考えることを目指しました。



日本の社会問題について学ぶスライド

「少子高齢化社会」をテーマとし、日本の状況を学びつつ、タイと比較してみるなどの学習を行いました。タイでも、10年から15年後には高齢化社会に突入します。日本の問題について学ぶことで、子どもたちがタイの未来を予測し、問題解決について考えることを目指しました。

2 日本で訪問した小学校との手紙交流

プログラムを通して訪問した徳島県上板町立高志小学校*2と、児童・生徒間の手紙交流を実施しました。勤務校の校長の協力を得て、子どもたちの交流から、両国間でよい関係をつくることを目指そうと話し合い、この交流が実現しました。日タイの先生が連絡を取りながら、高志小学校とBan Kad Wittayakhom Schoolの児童・生徒が2~3名で一組になるよう「バディ」を決めて、お互いのバディに自己紹介などのメッセージを手紙にして送りあいました。タイからは、チェンマイの文化に関する写真を添えて送りました。最初の手紙は2019年末に発送し、2020年10月現在も手紙交換が続いています(ちょうど、日本からタイに向けての手紙が発出されたとの連絡を受けて、到着を待っているところです)。

この活動を通して、私の生徒たちは日本語で簡単なメッセージを書くことを学びました。両国の子どもたちにとって、新しい経験を生み出し、両国のよい関係構築につながる活動になっていると思います。



タイから日本に送るポストカード

*1 タイの学校では、5月16日に新しい年度が始まる。

外務省「諸外国・地域の学校情報」タイ

https://www.mofa.go.jp/mofaj/toko/world_school/01asia/infoC10600.html

*2 同校教員の富樫未来氏の文章は42ページでお読みいただけます。

インドの先生の実践

多様なオンラインプラットフォームを活用して

2019年度「インド教職員招へいプログラム」参加者のお一人であり、交流事業のSNS「TREE」にもたびたび活動を共有してくださるプリティ・シュリヴァスタヴァ (Ms. Preeti Shrivastava) 先生に、コロナ禍でのオンラインによる教育活動のご紹介とメッセージをいただきました。

プリティ先生は、インド北東部のグジャラート州にある学校で、高校生に英語を教えています。2019年のプログラムでも、日本の高校生にインドの文化などを紹介する授業を行いました。(翻訳・編集: ACCU)

Message

みなさん、こんにちは!

はじめに、世界的なパンデミックによる困難な時代に、オンライン教育および学習プロセスというチャレンジを真摯に受け入れてくれたあなた、そしてすべての教職員を祝福したいと思います。

テクノロジーはあらゆる分野やセクターに進出しており、まさに今、教育がそのプラス面を享受する時期がきています。プロジェクター、パワーポイントを使ったプレゼンテーション、Googleフォーム、スライド、シートやドキュメントの使用、オンラインウェビナーの実施は、教育分野でもかなり前から行われてきましたが、現代のテクノロジー

の真に実用的な部分が日々の教育・学習のなかに取り入れられたのは最近のことです。

生徒たちに働きかける方法はたくさんありますが、いまや遠距離が問題になることはほとんどありません。そのため、そうした働きかけのうちいくつかは、真に有益であると証明されています。オンライン授業を行うことは別に、教師によるブログは、他のツールや



教材と同様に、日々のコンテンツ、ワークシート、宿題などを提供するのに重要な役割を果たしています。生徒たちはいつでもそれらを活用し、自分のペースで学習を進めることができます。

子どもたちの間違いを修正することもまた重要です。子どもたちの日々の作業は、Google ClassroomやGoogleフォームのリンクを使ってアップロードしています。

子どもたちは、教師がYouTubeチャンネルで簡単にできることを話したり説明したりするのを見るのが大好きです。学習と合わせてさまざまな手段で、子どもたちが創造性と想像力を発揮する場を提供するのがよいでしょう。それは常にインスピレーションの源となるからです。

フラッシュカード(暗記カード)は電子化されたEカードを使うことで、画像を介したリンクを含む、1枚に集約された情報源となります。また、Flipbookは、プロジェクトの紹介に便利です。インタラクティブな教材を使用することで、子どもたちも簡単に楽しく作業を行うことができます。

教師が自分のモチベーションを高め、教育活動をアップデートし、子どもたちの発達段階に応じて学び、トライし続ける意欲があれば、限界などありません。これからの輝かしい発展を祈っています。

愛をこめて

プリティ・シュリヴァスタヴァ

英語学習動画等を視聴できるプリティ先生のYoutubeチャンネル
https://www.youtube.com/channel/UC9RndBJWz-y_fUC4y6IVWA



リンクを含むEカード



めくって楽しむFlipbook

「一人一人の児童(生徒)が、自分のよさや可能性を認識するとともに、あらゆる他者を価値のある存在として尊重し、多様な人々と協働しながら様々な社会的変化を乗り越え、豊かな人生を切り拓き、持続可能な社会の創り手となることができるようにすることが求められる」

これは、平成29年・30年改訂学習指導要領の前文から一部を抜粋したものです。小学校、中学校、高等学校のそれぞれの学習指導要領において、教育を通して目指すものとして「持続可能な社会の創り手」という言葉が使われています。

「持続可能」「教育」というキーワードから、「ESD(持続可能な開発のための教育)」を連想する方は少なくないでしょう。この冊子をお読みくださっている方ならなおのことです。日本の提案により世界首脳会議実施計画に「ESDの10年」に関する記述が盛り込まれたのは2002年のことですが、そこから、ESDが少しずつ広がり、日本における教育課程(カリキュラム)編成の基準である学習指導要領の前文に「持続可能な社会の創り手」という言葉が登場するまで、実に15年がかかりました。

2015年にニューヨーク国連本部で開催された「国連持続可能な開発サミット」において採択された成果文書「我々の世界を変革する：持続可能な開発のための2030アジェンダ」では、人間、地球及び繁栄のための行動計画として、宣言および目標を掲げていますが、この目標こそが「SDGs(持続可能な開発目標)」です。SDGsには17の目標があり、そのうちの目標4「すべての人々への包摂的かつ公正な質の高い教育を提供し、生涯学習の機会を促進する」の中でもESDについて言及されています。

日本はアジアの中、世界の中にあります。学習指導要領の前文にある「持続可能な社会の創り手」を育てることは、教育におけるSDGs達成に貢献していると言えるのです。

この教職員国際交流事業においても「持続可能性」「アジアとの協働」は大切なキーワードです。住んでいる場所や使う言葉は違っても、交流を深めていくうちに共通する課題、協働できる分野の発見を通して、相手をよりよく知っていくことができます。

本冊子の第2章では、13名の教育関係者が、教職員国際交流や国際理解教育を通してそれぞれの場所から、それぞれの問題意識のもとで活動に取り組んでいる様子を紹介して下さっています。教職員自身が地球規模の課題を自分事として考える視野をもちながらも、身近な課題をおろそかにしない「持続可能な社会の創り手」として、次世代の育成に取り組まれていらっしゃる事が伝わります。

壮大な問いを自分に引き寄せてみる—教職員国際交流ワークショップから

ACCUでは2019年の2月に、本事業にかかる報告会・ワークショップを実施しました。その日のプログラムの一つとして、玉川大学の小林亮教授のファシリテーションのもと、ユネスコの価値教育にふれ、地球市民性の育成や多文化共生の観点から韓国・中国・タイ・インドの事業運営担当者と日本国内の教職員の方々と共に、このような問いについて議論しました。

「よき地球市民とはどのような人でしょうか？」

突然ですが、あなたにとっては、どうでしょうか。壮大な問いのようできて、実は自分が教育を通して何をやってみたいか、どんな子どもを育てたいか…そんなことに繋がる答えが出るかもしれません。

このワークショップの様子は、参照欄のURLから閲覧できる報告書にも掲載されています。また、海外の方から見た教職員国際交流の魅力や、この冊子で活動の様子をお寄せくださった先生の発表の様子などもお読みいただけます。ぜひご覧ください。

参照

- 文部科学省ウェブサイト
「平成 29・30 年改訂 学習指導要領、解説等」
https://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/1384661.htm
- 文部科学省ウェブサイト
「持続可能な開発のための教育 (ESD : Education for Sustainable Development)」
<https://www.mext.go.jp/unesco/004/1339957.htm>
- 国連広報センターウェブサイト「2030 アジェンダ」
https://www.unic.or.jp/activities/economic_social_development/sustainable_development/2030agenda/
- ユネスコ・アジア文化センター編
「文部科学省委託平成 30 年度初等中等教職員国際交流事業第一回エキスパートミーティング・初等中等教職員国際交流事業報告会&ワークショップ実施報告書」
https://www.accu.or.jp/cms/wp-content/uploads/2020/11/Report_1st-Expert-Meeting-and-Conference_secured.pdf

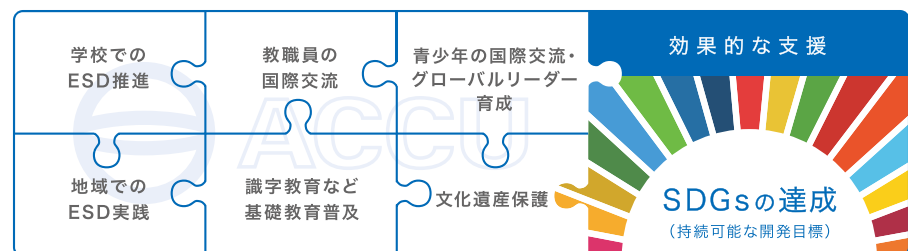
ユネスコ・アジア文化センター (ACCU) について

おわりに

ACCUとは？

ACCUは、ユネスコ(国際連合教育科学文化機関)の基本方針に沿って、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献します。

東京と奈良の2つの拠点から、アジア太平洋地域のユネスコ加盟国と協力して教育協力、国際教育交流、文化遺産保護協力の分野での事業を推進しています。



SDGs: Sustainable Development Goals

ACCUと教職員国際交流事業

ACCUは2001年から約20年にわたり、国際機関および政府機関の委託を受けて、教職員間の国際交流事業を企画・実施・運営してきました。2020年度は、文部科学省委託「令和2年度初等中等教職員国際交流事業」のもとで、日本と韓国・中国・タイ・インドの4か国の教職員を対象にした交流事業を実施しています。



ACCU 国際教育交流部

ACCU ウェブサイト：<https://www.accu.or.jp/>

Facebook ページ：<https://www.facebook.com/accu.or.jp/>

メールマガジン(月1回配信)のご登録

ACCU 広報担当(kouhou@accu.or.jp)まで「メールマガジン登録希望」と書いてご連絡ください。

2001年より始まった教職員国際交流事業は、互いの国の教育や文化の相互理解を深め交流を育むことにより、教職員自身が変容し、多様な文化が尊重される平和で持続可能な社会の実現に貢献することを目標としている。この目標を達成すべくACCUは事業実施者として、プログラムの各構成要素について委託元である文部科学省やユネスコをはじめとする国際機関、各国の教育行政機関と連携を図り、常に試行錯誤しながら取り組んできた。開始当初は交流へ向けての前段階ともいえる視察的要素が多かったが、今では各国教職員同士のワークショップや授業実践を交えるなどアクティブラーニング的な要素と将来の交流の継続性への期待が強くなっている。また、プログラムの規模や期間についても随分と変わってきた。一方で、教職員が本事業の主役(ターゲット)であること、そして「教職員同士の交流を通して、互いの国の教育や文化について相互理解を深め、教員自身が変容していく端緒を開き、またその結果、教育の質を高めることに資すること」とした事業目標を設定していることについてはぶれずに堅守している。なぜなら未来を創造する子どもたち、予測のつかない未来を生きる子どもたちの育成に携わる教職員の方々の影響力は計り知れないからである。教職員にターゲットを絞った国際交流事業であることの意義はますます高まっていると考える。

ここに書いてくださった先生方のストーリーはいわゆるグッドプラクティスとしての完成形のみを取り纏めたのではなく、試行錯誤しながら成功も失敗も交えての自らの変容であり、これからも続くストーリーである。教職員交流のプログラムは期間7日間という限られたものであり、国際交流ワークショップの参加は3~4時間ほどの短時間で終える時もある。そのような一瞬の経験から端を発して「自分の視点が絶対ではないこと」、「共感すること」、「世界が多様であることの実感」、「親日や親中ではなく、知日や知中であること」、「学校全体での受け入れ体制」、「自分の経験を子どもたちに」など、執筆者自身の体験を共有していただいた。本書を読んで頂いたとおり、教職員の数だけ交流の在り方が存在する。

ACCU国際教育交流事業のCore Value(基本的価値)は、国境を越えた教職員の「出会いと学び合いのプラットフォームづくり」です。対象国のニーズ、それぞれの教育現場の声に心と耳を傾けながら、今後も多様なプログラムを企画・実施していきます。最後になりますが、本手引書にお力添えを頂いた執筆者の皆様、監修頂いた手島先生に心より御礼申し上げます。COVID-19が猛威を振るう中、子どもたちの学びの継続に最善を尽くされておられる皆様の健康が守られますよう心よりお祈り申し上げます。

公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 国際教育交流部長 進藤 由美

教職員国際交流の手引き

TREE of International Exchange - 国際交流の木の下で -

発行日	令和3年(2021年)2月28日
発行	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター 東京都千代田区神田神保町 1-32-7F 出版クラブビル TEL: 03-5577-2853 FAX: 03-5577-2854 URL: https://www.accu.or.jp/
執筆協力 (五十音順)	朝日仁美、アディソン・ネティップ、安部裕太郎、 大栗真佐美、大塚雅信、坂下充輝、 高橋勝也、竹島潤、手島利夫、 富樫未来、プリティ・シュリヴァスタヴァ、 町田直美、松岡由美子、松野至、物井タリニー
インタビュー協力	米田雅朗 (新宿区立大久保図書館 館長)
監修協力 (P58～59)	手島利夫 (ESD,SDGsを推進する手島利夫の研究室 室長 / 江東区立八名川小学校 前校長)
デザイン・印刷・製本	株式会社デザイン・モイ (アートディレクション / 今泉明子、デザイン / 村田愛 高井美月)
編集	公益財団法人ユネスコ・アジア文化センター国際教育交流部 進藤由美、伊藤妙恵、岡野晃一、小澤華木、高松彩乃、天満実嘉
編集統括	高松彩乃

©ユネスコ・アジア文化センター 2021 Printed in Japan

ISBN978-4-909607-05-8

禁無断転載・複製

この冊子は文部科学省委託「令和2年度初等中等教職員国際交流事業」により作成されました。